

「意味生成表現特論」

「造形表現カリキュラム開発特論」

経過と展望

高石次郎 Takaishi Jiro

## 1 平成12・13年度の概略

平成12年度から上越教育大学では、臨床的・実践的な教育研究をめざして従来の学校教育専攻をベースとしながらも、教科専門の教官も交えて学習臨床コースが新しく立ち上げられた。ここに報告する内容は「意味生成表現特論」と「造形表現カリキュラム開発特論」の授業（大学院）が中心となっているが、これらの授業科目はその学習臨床コース（学習過程臨床分野）で開講されたものである。この2つの授業は前期と後期に割り付けられており継続して受講することを一応の約束としている。

本授業で私が特に意識していることは以下のことである。それは、①造形行為の中で人やことやものにおいて、その状況に応じて新たな関係が生じ、新たな行為が展開する。このことは自己/他者の関係を含めてコミュニケーション能力にも繋がる。②結果はその過程の出来事によって生まれる。作品をつくるということが目的となるのではなく、結果的に作品と呼ばれるものになる。過程における行為の重要性が見えてくる。③造形活動に限らず、私たちの生活の中では常に身体的な意味が生成されている。④身体的な意味の生成が行われていることは当然のことであるのだが、そのことを、顕在化しないといけなくらい現代社会は表層的な価値で覆われており、そのことが今日の様々な問題に影響を及ぼしている。・・・など・・・。

これらのことを学校教育における図画工作・美術のこととして捉える。何故ならば、人間のことやものをつくること、つまり「生きる」ことの根底（深層）に触れているようなことといえるからである。

12年度「意味生成表現特論」では担当教官（5名）がそれぞれの専門分野からの講義を行った後、受講生の発表、受講生・教官でのディスカッションを行った。同年「造形表現カリキュラム開発特論」では記号論・状況論

についての講義、附属中学校授業見学と協議会、地域の春日小学校での共同研究授業と協議会を実施した。

<実践12-1>

- 1 日時 2000年12月2日（土）8：35～11：25
- 2 場所 春日小学校 3年4教室
- 3 対象学年 3年生4クラス
- 4 活動名 『うつしてあそぼう』
- 5 授業者 「造形表現カリキュラム開発特論」  
教官5名、受講大学院生7名、その他

13年度の「意味生成表現特論」は12年度とほぼ同様であったが、「意味生成表現特論」と「造形表現カリキュラム開発特論」を通して、春日小学校で各学期（7月、12月、1月）に共同研究授業と協議会を実施した。

<実践13-1>

- 1 日時 2001年7月16日（月）9：30～11：30
- 2 場所 春日小学校 体育館
- 3 対象学年 4年生4クラス
- 4 活動名 『新聞紙でつなごう』
- 5 授業者 「意味生成表現特論」  
教官3名、受講大学院生22名、その他

<実践13-2>

- 1 日時 2001年12月13日（木）9：30～11：30
- 2 場所 春日小学校 体育館
- 3 対象学年 4年生4クラス
- 4 活動名 『冬のあしおと』
- 5 授業者 「造形表現カリキュラム開発特論」  
教官3名、受講大学院生10名、その他

<実践13-3>

- 1 日時 2002年1月16日（水）9：30～11：30
- 2 場所 春日小学校 体育館
- 3 対象学年 4年生4クラス
- 4 活動名 『光や風で遊ぼう』
- 5 授業者 「造形表現カリキュラム開発特論」  
教官2名、受講大学院生10名、その他

## 2 12年度の共同研究授業

春日小学校の子どもと担任教諭の積極的な協力を得て、共同研究授業と協議会の本授業での位置付けが明確になっていった。

<実践12-1>では、初めての共同研究授業しかも4クラス合同ということや春日小学校から「版表現をお願いします」との要望があったので戸惑った。状況や意味生成という観点からすると、いわゆる「版画」を行う時間、つまり、版画という方法を作業的に修得するような表層的な活動になることは避けなかった。従って、受講生を「版画」の行為や素材と人間との関係の根底に遡って4グループ(スタンプ班、エンボス班、逆ステンシル班、フロッタージュ班)に分け各教室で展開することにした。ただし子どもたちは各教室を自由に移動できるようにした。また、土曜日(午前)の全時間を使っての活動なのだから、学校の時間割通りに進行されるという学校での自明性を敢えて避け、登校したら即、図画工作の活動が始まるように設定した。大学側の授業者は前日の夕方に教室や廊下に新聞紙や段ボール箱を広げる等の準備を終わらせ、当日は子どもたちより早く朝7:30には各教室で活動を始め、登校してきた子どもから活動を開始させ、8:30に一齐に説明をすることにした。そのことによって、子どもたちを身体的な活動へ導けたと考えている。

この実践以降、春日小学校では保護者向けの活動案内を学級通信などで連絡することになった。また同時に年間行事(イベント)的な要素が生じてくることとなった。新聞社からの取材にあたって、記者と夜遅くまで議論をし、その記者が実践の当日に全時間にわたって参加され記事にされたことや、一部の保護者がこのような活動の意義を理解して下さったことなど、この活動による子どもたち以外の影響もあった。

この研究授業の子どもたちのアンケート(感想文)は概ね好評であった。後日開催された協議会において、春日小学校と大学院生からの反省などが出されたが、「活動の中で使った段ボール箱が活動の後も、教室で形を変えながら引き続いていること。」「日頃なかなかコミュニケーションを取れない子どもが活動に参加していた。」等の春日小学校からの報告は新たにこのような実践の意義を確信させるものであった。

## 3 13年度の共同研究授業と課題

13年度の<実践13-1>は、ここ数年大学でも時々行う活動内容で教官から提示して実施した。次の<実践13-2>と<実践13-3>は、受講生を2つの班に分けそれぞれが活動内容の立案と実施を担当することにした。13年度に3回の実践を行ったことにより、いくつかの問題点が否応なしに表面化してきた。

問題の起因するところは、「新しい学力観」をベースとした「造形遊び」の活動に対する各人の捉え方の差異からくるものではないかと思われる。本授業自体が科目名にもあるように「意味生成」に立脚しており、<「意味生成」～「造形遊び」～「新しい学力観」>という関係で捉えているのであるから、少なくとも、このような心構えを持ち実践に臨むことは不可欠だと考えている。しかしながら、このことは今日の学校や学びのあり方を取り巻く社会の問題にも関わり、予想以上に困難なことであることが分かってきた。このことは、「理想と現実の違い」だ」という言葉で片付けられ、問題の本質を霧散させるとも言い換えられるかもしれない。そのようなことに関して、次のような課題が具体的に見えてきた。

①造形遊びの活動の中から、様々な教科にある知識や技術との絡み(展開)が派生してくるが、「造形遊びを創造とするならば、創造と知識・技術との関係、そして学年が上がるにつれてその在り方が高度になるということ」の分断された考え方をどう捉えるか。②「造形遊び」の遊びの意味をどう捉えるか。③小学校側の共同研究授業の位置付け(小学校からのカリキュラム)と大学側の位置付け(大学からのカリキュラム)の認識と差異をどうするか。④学校教育での図画工作・美術をどう捉え、総合的な学習も絡んでくるだろうが、年間のカリキュラムの中で「造形遊び」をどのように関連づけるか。・・・など・・・。

## 4 展望

4回の実践を振り返って、最も大切にすべきところの子どもたちの学びの成立という点では、ほぼ満足のいく成果が得られたと思っている。むしろ、授業者(大人)側の学びや学校を取り巻く社会の在り方の議論が必要で、そこを避けて進むことができないことが明確になってきた。

その議論について、子どもたちの身体的な学びの活動

を保証する一方で、授業者は常にイイ・ワルイなどの二元論的な授業評価を気にしてしまうことが挙げられる。(そういう意味では協議会、アンケートや年間行事化も考えものだが・・・)つまり、子どもの活動のく「意味生成」～「造形遊び」～「新しい学力観」という関係の捉え方は、二元論的な在り方からの脱却ともいえ、さらにいうならば、従来の価値観(知)の捉え返しともいえるのかもしれない。

ということは、本授業には子どもたちの学びの成立とは別の意味合いもあるといえる。それは、授業者(大人)が子どもの中に入り、そこにある状況の変化について深く考えることによって、子どもたちの活動の中で次々に新たな関係が生まれ、新たな展開がなされること、つまり意味の生成が実感できることである。しかし、この実感は‘意味の生成があったからイイ’などの形で納得するものではなく、私たちが子どもと関わる際の心構えのようなものであるのかもしれない。

12・13年度の反省をもとに、14年度は次のように計画している。

「意味生成表現特論」では、担当教官(西村、高石)がそれぞれの立場から、授業者(大人)側の議論とく「意味生成」～「造形遊び」～「新しい学力観」という関係の捉え方について講義をする。その後、学習過程臨床分野の教官(松本)を中心にく「意味生成」～「造形遊び」～「新しい学力観」という関係の捉え方について子ども側の議論として、実践ビデオ等により授業分析を行う。また、この授業分析の講義には、春日小学校の担任教諭にも参加して頂くと共に、小学校と大学の間の認識の違いや、そこにある問題などを明確にしていく。

「造形表現カリキュラム開発特論」では、春日小学校での共同研究授業を2回程度行い、その都度、協議会を実施する。また、子ども的人数が多すぎて個々の活動がじっくり見れないという12・13年度の反省と教官・受講者の減数により、14年度は2年生1クラスで実施することにした。

## 5 結

このように、地域の小学校(子ども、教諭)・受講生・教官が本授業を通して、子ども・造形遊びそして意味生成などのキーワードを繋がりとして、カリキュラムを作りながら本授業を展開するという形で進行している。見方を変えるならば、このことは大学の学生と教官が従来の慣習を超えて、自ら学ぶわけで、子どもを対象

と考えている新しい学力観は、実は、学生・教官・大学も対象者であることに気付くことになるようだ。



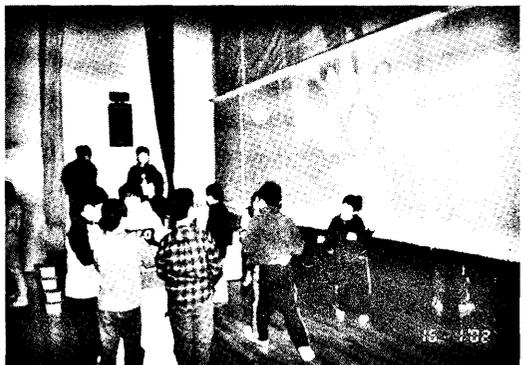
〈実践 12-1〉『うつつしてあそぼう』



〈実践 13-1〉『新聞紙でつなごう』



〈実践 13-2〉『冬のあしおと』



〈実践 13-3〉『光や風で遊ぼう』①